

能を切る

「四賢婦人・矢嶋桐子の生涯」

文＝福永無想



第六回 「つせ子の縁談」

矢嶋家の長兄・源助は、父・直明の死後、惣庄屋を返上し、妻子や妹たちと故郷の益城に戻ってきた。

杉堂の家の前を流れる布田川の瀬音に耳を傾けながら、「ここは、いっちゃん変わらんね」と勝子は一人つぶやいた。幼い頃、母の鶴子に連れられ、宮園の役宅から杉堂の実家に里帰りをしたことを思い出す。この川で姉たちとセリを摘んだ遠い春の日のこと、ひどく懐かしまれた。

「あのう、もしや、矢嶋のお嬢さまではございませんか…」

声を掛けてきたのは近くに住むという、ヨシという女性だった。年の頃なら四十をとうに過ぎたあたりだろうか。畑からの帰りと思われ、サツマイモがどっさりに入った背負い籠を地べたに置くと、頭の手ぬぐいを取り、自分がかつて矢嶋家の奉公人だったと告げた。

「旦那さまや奥さまにおかれては、ほんに寂

しいこつで…」

ヨシは言葉少なにそう言い、頭を深く下げ、手ぬぐいで目頭をおさえた。

三十数年前、鶴子が矢嶋家に嫁いだばかりの頃のこつだった。当時、14歳でおなご衆として仕えていたヨシに鶴子は特に目を掛けた。ヨシは福原の山奥の村から奉公にあがっていた娘で、鶴子はこの幼い奉公人が、いずれ嫁いでいく婚家で恥をかかないようにと、読み書きや菓の調合などを教え込んだのだった。その後ヨシは奉公を終え、杉堂の農家に嫁いだ。

こうして矢嶋家が再び益城に戻ったことで、ヨシは日を置いては顔を出すようになった。

「兄さま、妹らの縁談のことですがね」

隣村の布田(西原村)に夫の竹崎律次郎と移り住み、百姓を営む3女の順子が源助を訪ねた。25歳になるつせ子と、23歳の勝子。世間一般の女子に比べると二人の婚期は遅れており、順子は今後のことを心配していたのだった。

まず、つせ子にもたらされたのは、23歳も親子ほど年が違ふ横井小楠の後添えの話だった。実はこの話は、数年前にも持ち上がったものである。

その頃の小楠は藩からの役も解かれ、分家としても独立できずに「部屋住み」として兄の時明の家で暮らしていた。この身分では公的結婚は認められず、熊本藩士の娘をめ

とるも内縁の妻という関係でしかなかった。だがこの頃、部屋住みの者が妾を持つことは大目に見られており、郷士の矢嶋家との縁組みが持ち上がった。しかし、

「娘たちは正妻として嫁がせる。模範的な夫婦として生きてきた私らにすれば、娘が妾となるは恥である」

生前の直明はきっぱりと言って、首を縦に振らなかった。その後、横井家では当主の時明が亡くなったことで小楠が家督を継いだ。内縁の妻は正妻となるも、産後の肥立ちが悪く、母子ともにこの世を去ってしまう。そして今回、再びつせ子にもたらされた後添えの縁談も、武士と平民の壁は厚く、やはり妾という立場に変わりはなかった。

「いずれ、身分の違いなどなくなる時代が来る。小楠先生は、そういう世の中をつくられるお方だ」

源助はそう言うて説き伏せ、つせ子は安政3(1856)年に横井家に入った。

「お勝さま、今年の里芋は実の重かつのだけましたね」

「これも、おヨシさんのおかげです」

勝子は畑で汗を流したり、家のことに明け暮れる日々を送りながら、たとえこのまま独り身を通すことになっても、それも人生だと達観しているところがあつた。

しかしそんな勝子にも、近くして縁談が持ち上がることになるのだった。

※この物語は、矢嶋桐子の資料をもとに描いたフィクションです



四賢婦人記念館

益城町杉堂1250 電話/286-4959

開館/9時30分～16時30分 休館/月曜(祝日の場合は翌日)

入館料/一般・高校生200円(160円)、小中学生100円(80円)

※()は30人以上の団体割引料金

